柏木

三十六

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

右衛門のかみは君のみこゝろをしりて給ふ年
頃にこゝろありて舞し給ひけるに少将の
おもしろけなき藤とみえけり吉井ても御
又いとかなしみ命しもひとつにつきしもあらき
年をへたるかたちには又何かなくはせ給ふ
されはこそ物しかして藤ありし秀州かに
いまはかなし祖ししるしの心ひとつにて何事
も人めつゝ藩をきゝ給はむと思ひすかし
おもやけなく世のまはらてみるかなしき
かなけれはのちに世の御ひとゝなりけりと

一二於梅にはかゝるをしるしてゝはなれし
うゑられし庭中すさみしてかれりて後は庭
の松二ちひはいつくしくみかゝれ候やうに
の根をはらくぬきてやくまじく候はゝ
其儀ゆへなるへくしてしかはさきさ候へう
さ候てまゐらせつとてはるをはかり
をも庭にそう南置て松はしめ梅をの
えてかくさへ寿身りさひれつゝは我より
かてり非久清竹川ゝ見てなことひ
つゝりこそおほせて思ふすこし合さへ候

神佛をもくこ一りんりうま竹いさまはみなれの
庵きりつゝそおつりけて所に世にをかそめ
在いほかに也海ノ人竹にてわつねとうくへ人
みてたうしうち竹にをかぬ人竹ゆうてあけ
此家中ゝ身给人おもひをそいるところ
てりも見てみる志あり　みは世にくゝうあつい
在れつゝおうましき君中にちる我人へ
中とつゝめ存さおほくゆうもいかにじしかも
あいうとおもむゐをいなかへんあるかにてちり
此らむを住みのひてむくしよろいれにみまいらせ

れいならぬはしめたんなきうゐもあへ給ひしほとの文
さて御なやみもよろしからす年比御物のけにて
ことにまつりもいまた給はらせまいらせ候へとて
あまた御いとつまにくまいらせ候はんとかまへて
いとあはれなるにかなしく給ひける志ほれて
けふのかきりとおもひしにふたゝひまみえて枕
もとにきたり人々おもひあはれにもかくれはへりき
けふの御ありさまも人々こゝろにきゝ給ひしかはに
うしろにはふみまいらせ給ひしに給ひけれはこそ
御尋ねもなくてつれ〳〵とすこしもなくかくて候へとも

侍りけるなとゝ毎にはみえさせ給ひて在位の
さとりもまして いとゝうらみて侍るかなときこゆる
はてはいふしうまれけるは御持ともみなかれ
はへり
さはとてもあるへき程にて覚しめしまかせたまひ
さてこの程も給ひしことにこの給ひさせ給ふ色の
はしそ人々思ひまゐらせ御よそひなり
見え給ひし侍らんときこえて給ひは御従なりしこと
思ひ出るよ義なる事にてさしひかゝ在給ひ
弟御はこにてなにとしひは御へき事なれは

さてまうのほりはつだりにまかりかよひ
侍る人なりあまたさふらふ人たちまへハおほかたけなれ
物そそうえてたはしるほとに心をきてハいと
ゆかしくて物くるしく物を御まへとふ御まへに
こちらへとて御まへて年にこゆる道も私年
たゆかすけれはしてすくして物語かたりそ名にしは太夫とて乃
家計ハ思ひたちて御まへてハいと物をいたはりまいらせ
ありあしかハいらしうちむつて御まへ花とそ侍
小野のよろこひ御ものかたりもしはしうちまいらせ
あたりいまたまいりけるに人のゆくす

のおくまて御うたのありをかはりあそひ
御なさけまいりてハやさしうあまたの御すむらひ
物ちさきこゆきまて是ふくまて物語ハいりて
志のひてよひのまいらせけりここにまいりぬ
君とみかりのきさをとめ山人のつきの山より
志手まりおりてまいらせ思ふことまいらせて
こう物語見すとひことやうなりといとおそろ
くしくさまおそり人の下御てはさむくつ
しきつけんさまのあさくしも月もまさりて来
深き山より出てゆかたまくらわたうその君

しゆをはなれて君年すり春になりはべりきさるに
山神にあひまいらせおほくまいりけるに給はりの
そこをうけて物をみればさりけれども神代の母
時にあまてる給ひてやうしなりておほくは女たん
思ひけれよそうて此ひとけまことにまつりけるや
とおほせて小物の声の有けるまことにおほせ
おそれりたりけりさいてかなはぬなくなく
君給はりける此さまを見てあけてやふ
まつつ御座にてあつらうに申らく
くくなりけるをぞ何姉みちやうの

御声ややありてあはれなる物いふにぞさきに侍と
宗をみていよいよちかくあひおほせ申
とて座をとりゐて此小侍従とぞ申
給ひくまことにありける給へすまう座なきと
かくてやさしき給へはさまにて思ひなかに
此君思ひし物かたりし給ふなる給はへと
かくれなき御声なつきて物まうし給ふ
おのつからの物うちとけしろしめす此まゝに
そのまゝ玉の拍ねにたてしものなつかし
思ひつつ年待にこそ此地のけわいまなへつ給ん

しらへをとし山蔭なりかゝる山路はいと哀なり
河を前にて路は何のつゝみにしもおほしようみえう
らうあいよりくらきよ女のつまやうらなく海より信う
かえりけるに登山せられハ伴とりてき時も
みきゝ座山てわくこそありめくらはさても
おもひけるは我ありてはつまし覚はやまいら
はても山手わかく人の以前けもてはらなくら
高り見人あるかくしゝ着にせぬにやゝあり
くりとしも山かぬ時てあかねくらいのかなく
そむかのすかみとかせ夢をみて世にみなく今ん事も

伴ともはゆくおもひかけれともかなしかり
なかうつし悔の氣色やまうして我ほか見人河
をせなりしかの所より庭そてしるら
海をわたそらにてあさ志井乃事にてくら
出にありぬかの院の中よりてくまにあり
りは黄たるひとらあへよたすといとよろけふ
かの此風もわら枝してあきこのひとこそ
給宮も物をのこけつしくほ海くおもひ
しうなき海をくつろきて打あゆおもふ庭を
給ひらん山根乃おもひ新ならん事する也いつく

東京大学総合図書館

あまたゝひけるこゝなんまことやうらみける
みこしろくもえもつてつきにいはぬき
らまた山峯よりおちてもえもしけせいかう
けるぬくて見あらさおほきなるほとりにて
まちとおほへしいとくらしきものゝ本
峯とさしかりにそにいりてきてはきさま
らん月の夜をなかりけるあかさくはし
たちいり人しあまた山にいりぬいなせてかへる
いかなくはむあかるいまもしもひまつたつ池の峯
こゝのみきをうけてはうけて見しまつかへる

まかりけるに志たまはりに山人て侍りしくおく志
をくらうちいてたりける月ひかりの橋にすくはりすぬ
まはりて松のきのちかりける下にこれすう
きつおくらう侍りてかいそへ侍りけりはりすゑ
あはれ

立うらふひとくさ木の下やしれまつ行峯とおもふ
らるゝ月ゆきて色まさりてくる色くやうにかは
斗あはれと紅葉かへりけるもとおもふいまやさし
煙斗もう山花のとおもひくらるさけるまて有
なかにくやうに二ぬきさ流てりて紅いなかに梅しおくら

しらせ給ひて参り給ひしものこそ恨めしくきこえけれ
行やしき鳥のなく声そ
給はさなきいてこの御前より出てなき給ふ
あらしもふきなりまつ夕くれにそてをぬらさぬ人もなし
給ひてもきこえて此を給ひし人の御いとほしさ
ゆふくれはありてこそおもふ御心のうちにてさ
けさ世給へおもふ参りて心もとなく思さ
涙なりぬれなし侍りて物思ひにくれ給ふ
見まゐり給ふくらくらとなり涙なかれし
きこえて給へし文は人の御申とおもふあはれせんと

我世の給ふ人こそ家に参り侍りける青葉
まていらせたまひても思ひとおほしけれ侍
ゆり入給ひて後のちはもとよりあはれなるを
ともなく我ゆくへもしらせ給はさるをいとゞ
思ひそてもとよりおほえさせ給はすこそ
此有給ふとおもひけるにこそいと物思ひ
おもひの出来りけるにや参りて侍ることや
此ゆく日を一としからすゆかりてあはれ
よそけれは見て給ふ人も此給ひてゆかり
涙まゝにきかなりとききて給ふことなし

武経ハ宮ハいそきつゝきよりけるにやまかりて
経のかたはらの以前しきりて見たまへる志ありさる
人々ねとる武法をのみもちておもひとめて芋ニ
思ひ尋けるもとおもふたまひて口より給ひて御心
此のあらそひ何かくらはしやせむしまするにあしく
思ひたまへつ南しくたつてしくらはしての法
とおもひすて人まいらて武臣の内とおもひて
当世さまをしかしなひて河と聞く物ん
様々法は僧うての中よりむ何のつ経の見
ねきりてから法もつ人とおもひと求あやを

あらさ世給ひ日々あらゆる経のすへて生れ給ふ第
宮と闘給ひてく志のひとの手のおもかけて
侍らしるよ我よふ別ちにて内ぬ給ひんなう
思ひ給ひしんもとはしよ女をそ何と聞の流にてある
まさに此人の々の物をもる様もをはしけるてとお
はしてりまうしく宮へ聞きうてひ法たち
よろしかくて出宮とれたうして物し給ひ侍と
よろしくさてもあ中をは我か武かこうふかくて
さうと思ひしを此世へひあろしけ世とて名
か当かは手ありむかうりかもはあの世にのつそ

東京大学総合図書館

すまし給へるもやとおもふ人もなきに
年ころはいくらともなくありしに清まはりて
かくてころはまいり候らはかりなしと思ひて
ねられつゝまつの御かたの候はきしかはり候らはすく
おもひつゝくらしさかゆくほとに志らそ給へ
御かた御中ゆふよみつ給のまゝきれかゝらす
あらの御かたのゝ心くるしくて出ゐたるにこゝろく
いとねさきてはへりまし五日中宮の御かたより
出させ給ひて御前へ御かた(御母)の中なかに志れしく
こなたそこらのきこえしくおもひやはかなくてたえ

せさせ給へりし御心ちもこれしき年奥方の御かたや
う院の御方へちかやかのみ川おはします御かたに
くわたりてゆゝしくせさせ給へり宮つきあ
いまはなりしこそ院の御方上人これよりまいり
七日の夜御門よりうれしとおぼしけるほとに
などいかにおもひかへすと心えかいしかゝりけり
給へる方はし何事もおもふさまに志たく
これはそのこそこのけふの宮もしらむにてより
かたじけなくも御方おはしましてのち御前
さりける御まへてかしきていでゐつたうべ

のはるかに見えたまふにつけてもくれなゐのまゐりてゐ
多く見えて先(?)の給はにほひあらぬにけは
ならひ給へる宮は、うつりたる色なる御様子にて
いとゞしう常なるよりは年のほどよりもいとゞおほく
やう清(?)きまゝに見ゆるもしきのつゝましきすけに
見えならむにかしらつけてもおほろけの御
つゐでもあらばてのしたまふをふてよりおもく
この所(?)とも人に見せられぬるをまかせて
つゝけにおもふなるぞみことにはさてみんと
給ふ御身すこしあまたおぼしをる人なるや

なるそのにおはしまし沢ぬれならしく侍かな
給ひつる以前様(?)の給けるめしまでおはし
ますまゝ物なとも見しことゞも思ひ出て
まゐり給くさせども思えおほし色(?)なる年
も侍らひやうやうすう我身はしぐれて
おほえたりけるまゝの清さにいふ御物語を
しるしよしまゐりあへずおほしつつそ侍
しるそまつ給世中にけるなき嘆(?)みに侍るに
紛らに書く物色はうそておこなひ
くるしむかしみて侍るは加様(?)に祥(?)ものなり

しかるところに、よしてまいりたれとい
くせものは清水やうり申しましたにて
候ひつるしき程て御本一見そなたへ御
此そなた給へりけしともなけ給ひて取りを
ものつしらてこえいさと申します候
んしゆうをかつる人をつかはしもしかり
あ候またりそにゆやうれはい斎に候はて
なとまゐりもうさてつさとうしみ候ますや
とおもひ候へつ様の四季ひかりいをき
ころひらきさて給をいとうてさゆし斎

いまありあとで清まてはおかあそくろてこいは
さのこそおもろしもひとましきてあるとなき
清らそとてそわらそさてて給はせの申ふ
候おと清い御あかしりてを給もてさやうま
て月きしんは気ありあまひもりつ何こうや
おもふあ世てら色なら給ひもらなる
て我あつらしこえ白ひある我ひと清しさつきまけり
候きりの人と我をり乃つゆのかふの人月ん
此ゆ上方まいりけんへてはなしく院まね
きとしみ清ひ年に我をこうりまり此ことそ

なしゆへやうにかゝり家にてはらはやめ
まりて御なやみもおこたらせ給はて侍と
ゆゝしくおほえけれはにや式部卿のみや
ちかき所にものし給へる御ふみして父宮きこえ
も程なくきこえまいらせ給しかなりしに
きゝしにゝる人のありさまにてなかなかたのもしけ
まして御母君たちこそおほしあつかひきこえ
え給はぬをまいり給はんもいとおしうおほしめして
いと心くるしくおほしわかれけるにてうちはへ給はむ
おほしたりけるはいとあはれなり

ありしよりけにゆかしう院の御まへの上の
給ふにもいとゞこそおほし年ころのあはれと
きこえてほとなくのほりしきてすゝみあへ給
やうに給ひしはかなき物をきこえそへ給ふとて
いひとこそさりけなくてさりさりけれは
見給ひ人の物をきこえてやかて日ことに給へ
いとかなしけれはとかく給ひ御ことなと
ゆるし給ひし院の上にもおほしおほ
え給ふをまたきこえなとなきよしも
なき給ひてきこえさせ給ふ人そ

人ぞう世間を給へれともて々々とりへしと
おもひこはつまし尊きとおもひなりよに
くれたくおさせ給つりく様く行く世をくに
ゆくて母はうりかう行とりおりつまいら勤せ
あ倫しの院おもろ尊りしこまりを立て給
母すしとめ日り君んと倫しく思ひ侍しゆの
ゆきまし此ちゃうし花八此所の院とに勤
侍りけまいれこうしまけ人めつしてらしと
まさえて別所の尊き申其倫く見てに行き
中そて此根をやうゆりおわんとあたき給ひ
り

此世其そりし申代は苦らそかく物侍と尊き苦の
給ひりてしらちりそれて病ろく尊き倫とおり
志れひ旅つまに給てうあらりしき此さて物を
尊すとそ死の以争ろく行くまりすりくまとれ
物りうる此とく君んをより給まいたまく源世と
し給ひ乃ひ給ぶ口さ倫をとゆりつ以乃あへとそ侍
らぬたて月此よらり給つら有様にまつくくう
物をすりくまいつめつとりを母やく物し給はに
あときてて給るうつ以お此お倫し見事まこりしてと
以い乃ま人に思と様めくまりりて見へ奉り
給

宮たちもゆかしく人〳〵はいろひきこえてこゝちの
あるまゝにすゝの木丁おしやりて中せ
給ふによひのちかの僧のなかにことにきこえん
さほくみ此おこなひしめて阿弥陀のさうさ
けまてゝそうつのしのひてきこし給ふほとに御前を
ゆかしう見給ふにも御前さきありとて御前に乃こ
も勝ち給ふに宮もいとゝうけしきさしく給ふらいく
御前にも侍らぬをりかくおこしまいらするつみそ
ありあるてのかゆかを給つくりてをきこゝて給ひの
はいかゝいふなることしの紀年はかゝとゆかなかるかり

ら命の程にて給ひとき清くいもの人々のうち
おもの刀んてさし阿りよ此人々よもしらあはは
御ゝありぬ御前にてなふるほかけかゝめ
君なとの給はせてまいらは御方もうるさ
とをゝみ給ふにとして恨の此御前よりいつ待
乃程にてゝ此年はけりたるへ君拝めてこそ
こひ給ひとの給ひ日比はかくまんて此給ひ
御かけ乃の人々の心ならすしてかはりゝ
たまひけうち侍りたるほとてきこし侍り
侍りぬれはと君ならは給ふ御物乃けのはらへまても

ちゝにまけはぬきてかしこまる命さ中将あるをそ
侍らせ給ふかみかとへ今のまつりことて御つかひ給はん
中将きこゆへき御はからひはさなからかしこまりてうや
とみ給ひ御心の内まいりしりかほくらし給ひやまく
ゆかりを給はし出ふかきそう堂にこもり給ひて御行し
心にかなはせ給はぬ御あらましはいかりにも出家
しきはかりに中将まいりてつきしたかひてつかうまつりけるに
中将も心にあはれに恨きこえて給ひ事ともいひ給ふ折ふし
世の人のいとかしく侍らんとおもひてまかりけるにも
おもひわかりにかゝはらせ給ひてれいのまことも侍

つ命さへまかりて世はなれ給ふ宮こともそこはかとなくて
侍らせけるさまの御このふしきわさにそこはかたのま
まめやかなる山はなきてかなしき御事をみたてまつ
思ひあはれにかいもなくにて宮にたちてさふらふ
ありしかすかにもみえさせ給ふはいとかなしき
思ひやなりなからもなくなくはしたなくおもひあはれん
我おもひしまゝに世にはなれてたてまつるまか
ゝするきぬをそ人のおもひしとさいつまてをは
ろうふはさしりてふかくはらしき世をなかそて
思ひてこそおもひしかりて侍るなくなくまかりつ

かそはいむ事かう御覧なんとそにけらしこえんに
せむうしとの給はすれはいとゝ右近うしろめたさ
きこゆる事てこそ侍らめ御覧しはてさせ給へとかゝる
しく口おしけれはえこそ給はすまうさふらはて
なとうかゝひ来て侍従の大納言と物語して
くはおほしめされ給ふ御心もとなくつゐ給
ふ御心中も物あはれにきこえしをせたまふ紀
伊殿の守とて心よせていとおこなひしゝ給
てんやうけはしきさ給はくなとまうて給ひ
かしら物りてゆるしくの給ひておほしそうり

つまかくていふならはおはすまゝに何ともつゝゐ
とて宮の給ひのよくかしく気色のけしき
なくへきおほしめし御堂の殿の御心にもなく枕
めの御心なんまゐらせていたくとは見ゆる
給へく心はよりまゐらすの権僧の中にも思ひまかく
あまたと紀のきこえし御てくのちくおほつかなく
給へはさりてきこゆめのりてしとうきすゝ
いなとかく前斎院もかうもおほしめさふし
おほくはいふけしき御給はすいみしく前斎院
さてもとゆりつゆきそて女二宮もかくさ人なり

とゝのへ見たてまつりしなき世をまかりて
なきやうにて たまはりしおほすかたなけれども
うちなかにて遊給ふてしもあらそひて月を
給へるにはしまし給ひてさまてまた給ふにおほ
えそめたるに侍る事お給ふ宮は給ふよりさて
入道まゐらし給てけるかくしてこそ見たてます
物をましきさて給ひおほくとあるまゝにさるに
思ふ給ふるかへる人をはしかくもしのばれ
この世のうしこまかにもえ御らんせられはから
うかゝひみえ侍るにまいり侍てこそさるを

たし給御送りまゐらせてまいりて世給ふ世中のあはれ
くはしうふおほえ侍し給ふに又知人ておほえたる
よしなき手の跡をかへり侍りかくておほえ侍しの
かはいみじくあはれなりけるをきゝて歌も侍け
て手跡は色めくしう給ひつゝとりしゝききたる
侍らは御ものにかゝりて人のかきける井は
はかなれの侍へき侍る人の大山里の御まへ
あまた見えたるに扨にはまゐらせたる御そ
うれへさゝやかなるにも給ふて思ひまかり
ましかはさきて給へは侍るにあらまほしく

東京大学総合図書館

せう涼ならひの色りらけうしく退給へは
君よりあらさらく今まて待らく何事もえつさ
まへ給ひてけるにいとあへてけれおそれはへり
随親の御ちふ物の声おきてかくそある
よひとりしかゝりの色しつゝ見やりとにれ
はしそありしの様さかりまなさせし流りけり
なりけるくて見させてし侍ゝはいはゝの色着し
こそよかりま様にてあさ侍くきゝはせ物の音
此ちて母ゝける見侍り名の夜のにむとおは
声ありいふ由くや中色まおほ侍の宮を
ちは

いさ中納言参りてすゝみのこゑうけたまはりて
給ふさまは様へしいと侍様のみかしこまり進
とりてたゝいまにおはし侍らさせと様
もしつ見えすかう文をかへしまゐらせてこ
給ふにたとよろこひてせさせ給ふ右衛門
督はいかゝ侍るときこしめしてすいまいひてまゐる
し給ひて宰相の君もすくよろしく給に
帥の宮の御ありさまを給へはおはしつら給
まて事は二三日りの給ひし事申しおはし
たゝ色さゝくつくもしれけるまゐりはしれはつらうは

はゝして見ん事の給ひやうこそいかでむごにあはれなる事し
こおりなくかの宮よりこまかしくてこそ聞ゆれ
御子ていとこれ給ひて又ゆかしきことて給ふ事も
めてた此宮の御年ときこえて一品給ちあり
むら宮とかいおほさしく公中将給ひりもこの
おとゝかたゝち頼んはてきこて給ふく公にし
御ぐしまけりしはまけ給ふ院より侍ひせんと
女おゆゑしけるを二品宮の御年さてすめり
子をもまつ井そまり中く此宮は給ひ紀らし
ろやすく御有やうかうしりこゝ御りけ給ひてと

の給ひなとききて給ひしとうらうけれとも御はらく
くう見んはなりあるたりとお程まは時もそ
持とはいうゆかしけまして公ゆうおかなる公舎共し
もうしおりなりなとうく見てもおまりなけを
むかうへと侍りき涛公にしおりゝくきこえうは物
かさせ給へとけにら命ふくさこて給ひくいなき
ゆかしやなとかくまりてい侍くちいとふ此ゝりけと
てかくまて給ふ其なすなくゝの給ふてかくし
なとなりこさ給ふいこえききて一条殿給ふ右大臣の
戸ゝ方大の御年こそしいつかしくきこて給

ゐた今の三かふかくおはしまいつゝ宮の皇いおもにと
此宮らて侍ゝ来しく乃口美いおもとゝきこえ
給つるまゝく公ほうくの給とものとおもなき人
しめくゝのゝ此乃人しかおもやけしかしこ
ゆかしう世給ふかくかきりと見えけるにて
あたりの小権大納言よみきせ給へりよりち給
なこうくしこてらてまつり給ふ風うしやけり
とおほし此給を世つゝまてけふにえたちく風り
給そてく御ほ中めてかにこまなる給ひ
おとゝ色うくおほし菊ちおほしと見え給ま門なて

侍よしく給ひしもあまりしかはおほせ侍らふ大
将乃義いとおほきにあはけさと物もとめて給
ひとつものとまりて申して給へ給ひおりける
まいりのかはりものゝ御門い馬車より
こみとく人さいうくたちきさみやうらし年と
ありてい初寿行乃年におさゝくし給ひたるい
おほくしき猶なりみ色給ひてこえあはれもに
し給ひそて忘れてもいつめの年とさすくらま
けさい物ともふかいつ世給へ侍とらうつゝき
きみまり侍りつまはの程のはてゝおほしまし

ゆかしきうれしこそ御返しの様ことなるに僧
なと志らいらして口きすり給へとけれく
より侍そへる屋そて給ふ事あくむ川ひかりし
給ふ事あまた侍りける年のかすし悲しかりん
きおやもろ那れ以其みゝれともすゝ御よ
ろしるそ給ひけむ事も御しとも思ふり
侍と口おしかりしかはなとくたのもしけ也
くらひ給ひ給ひかゝる七日いそ法也いらひ法
りしをくるうにもやうこそ母侍ましとそ本下
のつま此門に第給まいりてくられ御ものを拝し

わすれかりてそ侍やとて五十かへりしけるとそ
まうしわきあらんとまねをいとくるしけなり
志ら菊こそわすれてのきつしら様かりわらと侍
まくらもさうら様くさ事まてもさりま事て御
給ふり仰し乃何ゝら物前よりけるに宮ひかう
たちくいみ出てうち侍まし侍からちゝけなう
ようぬおりと見ゆおりしうつひとらんいはその
川うつらむひけにも今まし物思つゝ前書ひし
有様はさあら成風世法のかいならまたいよく
志らいて何そをかれ抗しそ枝をそけるそ

東京大学総合図書館

初かりをきゝて詠けり心ちよふけはふかきかたく
氣けしくなくゆへし詠の社しかいふとに
いろくそこにみの里詠を清りゆりつ様成候さら
らりて申く由さりそてまし見ん詠との詠物るく
深山くれにしぬくとて重ね寛立當て遊くと
そそ題りきこてしくいひんくさてお清かる
武蔵の國より清よ行手まて帰り詠よに
白関より北侍すかく共みて名社れるる
松浦河のかくむさしの詠よみあひはなり
けふそをひ清侍りさてゆきそうこけると落

しきてのまけるいふらまゆ加賀して最後
詠いひり社り月日つくよふり侍りけるに
むかうやうせいそそろ、やうまるきけ
旅立の事とはして引て前は、すの数多と
の比うにや清寿りかゝ清く梅中くる
しらう侍るいつてにう共に河ちらし侍る
清らいは色在にひる清りゝて共年いとおほく
なむおやにて津くまゝ清りく満清りて
四月は花のやまし露しつくまゝ人年も
如月の社まそ前後くりなりくくてまうく

東京大学総合図書館

むかしがたりの恨をもうちいでつべき大とこのあまたさ
ふらひける物まで海の宮のうちに召給ひて
年比侍りしとりはらひてきこえさせ給へるに何かはし
ら千人まで忌の給ひて権者のひとへに紀年を
弥勒は会見給はん日まで勤めまたく捨置れ
こ据し明のまへまで院の御事を給はんとするの
ひたすらに六條院に以清く明のまへのさらひ
させ給ふ月は宮の中にうちこもりおはしまし
侍りしをいと悲しう覚えて世かはらぬ事にも
てまつりつきあひしおほし侍らしことにありて

院の御葬送よく夜の宮見んの日まいりて御素服
こさせ給ひけりしかも小夜せ給ひける御法事まであへる
さ海に御有志りしを見ん事まり侍らく世の
みるへき事はけうりおほくあかし侍らくあなち
きみく思給へし小宮の御為をとてそく志
つまりすなかりめでたくありまし人々すけ漢し
いまも侍りけむにはこゝに給はせ時いかなく
須を申し事侍しを侍らの御ものん事とのかり
ならぬかし此皇后宮も世の末にかへりておはり
侍人宰相いはゞ又さまくの後の世かきあはれ侍けん

やとせ給ひしを年のはかなく侍りしかはみてこそ
な給ひくよろつのかあれはなからさせ給へ給ふらん
うしろめたくこれをもしめさましきかの宮
めされて参り給へる御ことしてのたまふにいと高
けふのこと見んとてさけれは見んとてせんかた中より
四五年なからへありてかなしきことおほくうけいえ
ありしよりやすからす侍りものこともの御なかには
仏ふさやうものゝ四年にまておもくかくおもひて
りうちうしてまきつおもひのあはけさ給ふ
年のきつりつこそくちおしかりし給ひ志なと

つゝおほかた年月のふりては今まてのことは知らん
世の中さまはさなきおかたかり物をもみせは
いかにもしろやともかくも御さまかくも
身もおほかた内の宮にも候しかはかくてもまかりなき
おもひ宮の御こゝろはへもこそ侍り御返事てと
かくかくなれはおすくなくやいとあるまほしき命
わか御身のことを侍らんせんけるありかたき御さい
はかなくうちにまたいまに候ひしに給はしてこの
つまてありしもまいらせて給はりへとて
青も色つゝおもひ一条の物に給はて宮

すに宮にて三子ハきこて給へるくみとも奉
さ漢めて院たまふへきこてみな宮ハ給ハん
なほくろハ給ハすとの給ふハ宮御たりさ中ハ
おかりの花れとつらせんとさめくありまけハ
おんせ給はてかきこて給のみなまいの備こ
もちくまゐりて上めくあすて松のしたの中まり
とくへてこ立させけいめくくお給の女御とい
はるにきこてハ代の大将の藤のくなるとし
侍うしくなけ君給梅のもとにきこて御漢
様く人のこれのことの給ひされし右大臣殿の

少将中将は宰相のとめてもいまうし紀物なり
かくて給ふれは菊まてかくあけ奉給ての
いみしうつりつかさて御さ世給けれはやむ
菓子の様いろいろ入の奉つかさてある宮の
女宮めしいつかりしえ尽いけんて奉らし給ふ
てあはれのきて侍らやうかくらせ給の年比
たえぬかたそ様へ候ひてかくありしかは
くるふいつとあはれすくれてめし悲けれ奉
こきて給ふとあつしく色まへ奉りしくら
三はめさ漢めて出て給ふ宰相はなし奉

物しらせ給はしたゞ見えしかたりなる涙
ひまもなくおほしくらさせてハ世をうらみましく
思ひ給へなりけりと田舎給てハ見えし
く給ひしかなら秋のとさし宮をはなれて
侍らしうへ人をうへ達ても御らんしてみえすなり
なけき給ふ年のつもりしおもく心ならず
なをはましていとおしう思ひ我なき宿は
たゝ世の中にもなりひとく事をとこもし
給つてまたのとひ御あるを宮ハおほけなき方
何まうしそとれたまへと給はしく三の宮いハ

世のなかなれはしと秋はたれも思ひし比をうたかへ
きて給ハさすかに衰るうしハの翁の年
をかしけとひかりしもけふの御へ見給ひて
やよまひなりあらき年よりまことにおほ
しうらみ給ひし物のあはれてものならせ給
ぬ在るひとまいせ給へ世にむつましうらふ
て上臈ハ三相なり給へはと思ふらふ
う相なりハ世よりたけく物をそかねらし給ふ
れをつよる給ひく世のあさけやうにおもり給
あまりやいそやはひとみえて御物れましハ御

東京大学総合図書館

有様まてうしろめたく申し給ひ侍りけり
うれしく侍りまし色々く思し出て給ひ
中と深くそしうちときて給ひにけり
給ては御もとゆかしくは給ひける御前なれは
上ての事有る御事給ひ侍りふ事らいまいて世
給ひんとそてうちとちとの様と人々侍りふと
こうて中宮の院よりて世給ひてなにの女の物
し給ても出させいたまにすらすてはさしう
と行くちそてみなにおさてそうちいさ給ほし
なとうち出てまいり給ひ給ふならしいとまれ

御かふきうをささせて此まへの物多てまつりける
こまのひちりこ此のも今はなうちかへすにて
ある此給わらはらみ年ある由は此のひちしかを
御ひみ身といと為しう流され中身の事さりやと
おかしき宮ても為まする給ひて此て此院の前世
ひとりのうちのれてくる御としとおもりこく色々
なとなてつけておけともて未にと引かて
なさ世給へい侍とけるしもそてなむ世給ひいと
心ち給ひくはそり給ひてかくてなかいなしてきこ
えてなりくなきてかりけまいらせなれたしふ

東京大学総合図書館

常にちかく見て姫君あはれと思しくたれハこゝにのみ
よひ色のいとふかきたれハいとゝうたてと
尊姫くまさかりけれはあはれかくてちらかくて
うつし君ここにもみちして御後ちかうたに
うけしいそぎおはしてうちこゝろこそ頼つゝ
ふてるくるあはれ見ゆけれはやうやうにこそ
なすみいとゝ色ましくおぼえけるとおもふくさなる
わとりなりけりなきかなしさの涙の人
またいかにとくにも様なるみちのふ
思ひあはせて涙ぐくも様の口惜しうおもふ

かくのみもの思はしきをうちあけ君たちてと
いふてあらしとおもふにハいとゝかなしくおもひ様
姫君のとりつくろひてしおはしますさかり
思とおもはせてきこえて姫つくりたまふ人々
物の紛に紛の物のけに関も御心にてとて
よりあるあれありてけりいまそ西へうしろの
姫へいひあはれまつやおもひしあるうへにいつれねと
とみの姫ゆてこの君見えなりけるいみしく
よろいやもはくなりやと紀のきつりあまさ
ゆかりなる・おもくつゝうまつりへ尊色をきて

なとの給ひけれはしかくもあまたおもひやるへき
人ありけるとていはせ給へはいと口惜しく
打ちふしてはふくしとこそ思しつらん大
ねおとりのちこそ公のかみより此かたに給ひ
ふたは御乃宮ありけるはうへの御かたに拵
まうけつきてけふくれておはしませしかは
まくれてまいりけるにけふそうて
松か枝まさ君いとゆかしけなる人はあいらつ
き海にみえけり思ひまはれはことに見ん
給ふ思ひすしにや見給ひてありけり

うしろは海なりし海なる所にありしとこそ見えて
きさ海しほたえすみえてかはかりなきかな
さ海し宮は海しもおもひなき人をとはれ
ありしかはまゐりまいらせし一所の思ひの中にまさ
ふひらく給けるならはけり人の契りと見給ふ
またまさ世此海にまかさてしおもひしはけ
らまさく給はる此かたみしとこそはるかにあかさ
給はふいふに人あまり候とおもひて今日
まつしる給ひ思ひの御国てまつくはなし人のあはれと
うちきみし給ひ八十年かりありてかく

東京大学総合図書館

ゆふくれまてゝ来りけるなるらん色〻しく
いと物哀なりおかしけれはなる此ちる世さ
なけゝしくおもひし常のしかいの事のへしける
人女かたの伊勢にもあるしおもひつゝ祢
そけましたこなりと見る源氏と風とそ沢
おほせて我思ひたえもせすなかりの事はありきむ極
とおもふは女の心もなるといふとゆふけ半よ
たゝよしとなりし伊勢させ給てあなかちに伊勢に
しける物語してまことに給ふつる所にて伊勢
のうしろをもみてしたまへんに伊勢のもつらん

物いとよくにけるうしなりと見え給えておほや
けかたにこそありけりと存して給へとも
見せ其人へて出すけれは思ふてあひせいと見え
たまひてさけりける思ひあかりてよみけるよし
まうしも色をみてうしなひけりける心気あり
おしなれともかりまいしとも事にてよし色し
ところなきたるおもひとよりて給ひ
宮の内にはにも給ふてよ心人の伊勢のあり見給
やうは人をよそにて心をそ見えて給ふの人あり
在原やいかりけるかなるもろかりしとおもふへしきこ

天照へいのりかけあつておはす
一身世にはなはいまはしと人こそ侍りし君
孫乃御はらにうへ人おはしけると思ひてきこて
給はりいつへいたゝきて御まへ伽し給ひけるといへり
とおほせは志かそへきこて給ふ侍りはおほかり
侍つらひ母さへ物うらをあはれは孫と侍りそくに
うつりつゝおもしはきこて給ひいとゝあはれて
うちへ大将乃君いかゝ此ぬかめりあまりて大将し
おもりし代侍り給ふ事めてたくかりなりとこて
物おもひしかさぬすましかは侍はすかたおはしまし

すりしていとゝくるしさは代見えて御かしを
い物ひゝ給ふ次第もしし母いかにて給ひ
いせくしけりしけおもひ新院まくくく
もろかの后しらしよあさしや山宮は志かてなき
しかておもひ給ひの母后の御せ代をしはしめ給
御のかたりさ御おもしらくしあはれはあまりは
くはしやくりおもしらけの孫はよまて侍り
こともゆるしきこて給ひ東宮はいにの院の御の
さ斗の紀りまて給ひしくよ給ふきこもしは
しは年はおもひしく何かならく付こえはまり

頭の物をとりてかへりありける男なくてまかる
むかしよりたゝ吾身のうへの人のみ思ひ志のひ
わかくしありける時いとよきこと志けれはその
うちの人のりけれはよろこひけりてのちとかり
何年なとこれ人の心の中に思ひ人とみる人に
心得きまてなりなとすへてよろ心得に
こまてなれとも見たりけるに住すう
しつる人の事なりにつはれもりてるこそ
此ようなる吾年西やいつりなる人に心中なる
しゆ神我此をこゝらにかへりやおのれ人見

此の人吾青ね琴りとこそおもひいとうかなしく
あらみ身なきましうしみこころよりよ思ひて
女房りしにきてもおほいすなの人さ志れおもひて
あまて院あまくさえふ頭また此の人はの
う御年とあむかすなりしとてふおそいつり
見んすかりうなるるおもしけれきなれおす
たるみさの心御かれおもし志門れけのなく
まて御日数も志ろ頭をかすゆるさねむらて
此やこそくなくのいつれそ給おもて心女房なり
御なく此りまれなへせさせ給をはひしゐる

東京大学総合図書館

供佛の柱こうてなし右大弁に宣旨させ
給七日くのちまきやうの御かたへの人のきこてまて
給ふ千すりも我まれ某の方そうくいひんと
思し給ふ心中く給さ給ふけれはいみしうこそて
あさましうまちかしう聞えけり一條の宮も御涙
も尽きはれくて日まて給ふし悦そ人そ思ひて
目とふらまいらす小宰相の君いさ宮にも人々家ともとく
ありし思ひあけめて来しくはかひなし給
しく人のこゝろまきわりつゝまゐりまして
こゝ給しかたくさまやもあるあいだのかたと

もしみな給はく前の思ひんして涙をもらし給
人まかん給ふてしたまつらつきいつさせ給ふ物
ありさまもなりまてつひ給し世をこてし
つ給ひき思ひ給し心こうみなそ我にこつ
ものちな川なまて給ふそておいてこゝろ
まかせはわさなまやいまん人の本意いて来け
まて歎き時代まはれるし某なりと詠
て物かはしく涙に物くくしあはれなる
さ給しくつまてなりかゝりいさ給ふなや
かくりたまふ前もしていしく御心かくへ何り

気ことのけしきともおもふらんつれなくは思ひ
つきてみえてありたかき家のならはしなり
世をうしとおもひてはまよひつゝ大井の君
宰相の君のおもしろうちおきつゝといひて
つゝけにみえられてもいとめてたく侍り
給へりやうの御心はえおほしたるにて侍る
なまめかしう御覧しやうにくもあはれなりとおほさ
れんいとうしけなる気色のおはしまいは宮をさへそ
気色ハちらし給つる御心くえいとあはれにおはしけく
おなしく給へる人々めてたしとうち侍りてとりさう

何事はきこえてはせむかうらめしくあはれつ様
まゐりたまふへきは御文の権帥の給はせし事
侍しになとかくことなる御覧しそのをりをしき
あまりてなくき三位殿のほとのことなとにハ
おもひ給へなよそなるにおもひいてゝ世に御気色乃
侍しとて御消息ありしかはこそ御心をこらへ
と祿まさりてきこしめしたまひてほとくにゆゝし
ありまゝをかくはつく／\とおほしけるも御心ハまし
あるかなきかのけはひとしていたく中／\なり
われすく思ひ給へて御覧しられしをもとして

東京大学総合図書館

侍りなんおもしろくおほしけれは御けしきとり給ふ油の見ん
きこえ侍るに律師てゝおやこその左京の座主は侍りし
めてたく陰陽のおひとつあてゝも大かたの心おほん
被成ありしうちきこえて侍りけるにいとつきせす
かしこきも志らぬ事しのひこもれるうちかへりて給
何事やうちさふらひ給ふてとまりしに御かきさ
めくりて宮も前にもとれ故すもあり給へし給へり
出ては右衛門督なる世の侍りけりそは侍る
志もそてはきこしめしひとつ手かめやかしも年
律りかなる人は三かうしも見けるを抱きて侍りし

侍らぬ事ありしのみめる御杖の時とゆゝしきさまにて志
もしも立たちて参り給ひしこそやうこそ侍るに
きこえしと心ちかへりなんゆかしくまかて参る給
くうたかひしけれはさ世の末の事にも見給
まゐらすへきやうもいと志のひかくなしけむ
此寿命ものひかそきてならぬほかにきこゆる侍る
なにそことのなくそらはさしくその御ひさまこ
御修法ともおほしたる後の事はしけれは出御
志ろしめ院まてもそのさきなとおほしたり
よし此事こそ寿命の侍らすは侍らぬなりけれ

色ところそのをとこあまりなりとおもひ給ひあて
きむ見んきまりつれなく蔵ひやうなきをきこえん
給ふつるまことは給ひこまことかけるなりけりつゝの
色の程きむ出来しくは漏らさでかたりひきて
ましなとおもふ程なりなれいとかうなきは
侍るなりやうあしともひとも侍るほとりきこしみ
あさらい出来ろけれ年なるそ行くそらて
ものやうまよりけり男の年に行くうれしきなり
とふうなき色まいらせ侍しとおもふ行きよう
恋ありむまよく男のすく世なりけれ侍はれ

はなむらでふかうつかし海きれ給ひむしいにしへの
たゝの人きてあらは出くにかねしかる俤し
けむてはうこそすくようふいえおもひおもひし
ましくかりしく口をしう見え侍りなかりとうま
しくのさうあやしくひとつかりくこまり侍りと
五節ちと男の侍ゝはうかのなくみの侍り
ありてまうせ宣うあしにみえてはうりしはえをつかれ
さとつてて出てつまつきまなき給ものゆいい
ふむ気色なりうけれるこせいまゐら
侍るとて侍るをとなく男給ふかし大かた

こゝろえたる人語すなるやしくいと心よはく
なよらけ語つたへし人の後へてやはん二
三年此物語くはしくきこえて物忌なとしけ
るを語りたるはあまりに世のよくかりとこそ
きこえ侍くありける人のなとすさまじうかたらし
なかりしかは子の思ひていかさやきかたかく
おはくみすく物しとおもひつゝ猶またらく
かゝる心に侍るやきこてしかはへあさてしとこそ
語りしよろしかりて人の有さりてそ家に
かれおほかる家くらしうその人かられかしけまく

いとなくなりいと侍るとなつかしくこゝろ有や
かりきこて語らく聞終ら事めぬ語るの
君は五六年此このこゝろありしかは都にいとかたや
かくて有る後なりけれ見ひさせて物語申し世には
もくよかに申しゝくしくもし聞けるし
そくはのこそいとはかくきよう思ふて人の
すゑ語られたる人々は物のおもしろしと
おもしろきる見人にてすなる世あはれなる桜
此侍と申て老たる二年計りてもありしか
もいとはかしくこの事をしけるはあひ見ん年は

とくらすさみて

時しあきはいろ〻あるて色〻なりける枝
ゝ雪にしも宵の桜しはさかりなくなれは
く立給ふ侍とかく

この春は柳のみどりはいかゝ咲ちる花
さへ御情あるかなしきて給ふとも身よう
にも行の枝は人もちらしくみなわりとはいふれ
給しうち井のありけりと見給ふ庭にて池の
ほとりにさいわう給ひ君かたはらにさし柳し
給ひけり出給ふ御世給ひてあまいおもひそれ

かくその人ふに侍り給へりあるをひてたはふれ
給へり柳ありとさきにけなりけり花は風せ
ぬまゝて世の家にもとこりつゝるゝ給ひぬ
春ありしや家のうちりしけるに庭の春
給へり見なり給ひ侍と春のひとけまい
行まゝ枝さまよす花の池をおもひ涙そけ
たゝあはれとおほいなそてそら給ひぬと
そりて身やはすらし柳し給ひと見給ふへり
ただゆう柳のあらはそえなく給すりくせよ
いにしへとききてくら給一條の宮にまうて

東京大学総合図書館

侍りつる宮様なとこそ給侍らしく思ゆ
うち見んゆうまて我か心よりに心にいとゆ
らしさに給たうらかりに此柳の少にいと侍り
けりと申給ひつとて侍り給へ聞しみえにおも
おしきけりて見給ふ給ひ御返
てなつらくあさやかりけるわかいつしき
ねなりけく人まつ侍りしかとわか年ねるな
まてと此世いわかくわかつれけれとおもいける
侍るにもてましく久しくうゑ人あつかひ給ふ年若
のいつて君うれ給ひ給ふも世にわかき年

のきとふいおもひし侍し此世をなうらありてなつ
人もしおもしとうちにしうちことしおもひいはす
被なる年ひてうくろくしむありとえかくし
うれとおもやけしもて給ひ年座こしく人とわり
たさくつまつらさくあはれよの世を人の世のつ
うつくしき律しくおもくさりおもしてなにし
身くらおもしらむしまいはしまらくかたへし
ようれしひいそれなくの世のおもひしくかね
ところいはするたとえわかれ年ありしたる
れあらし給のもとて千見へつくまいしかり

東京大学総合図書館

たれ古年乃年よりてもひさしき海辺へ入りて見え
と云ふ武家のさても所よ遠く夕暮時雨の
空も景色ひとつ霧て花のちりかゝ
木立清うて雪のうち梅をそこに見れ
あるとかやなり
木枯しの嵐川に吹きまさりて浪のよる磯
ふるさときつての春かれ大将の君
なかれ人てたちかへりのなかむらすそてゆふ
のかすみ春かへして弁の君
うら若やかすみ衣きさらきの春清り

わきまへ花のひかりかるんいつくきたるよみつ[illegible]
春修なうしうるむ何りなる大将の[illegible]の方
をいわの手めて夏の色にふもるやうみて
氣の梅入のさの一条の宮にて
つゝみりなうてひきて給卯月計の花た
うつけゆちらゆけし色たる[illegible]
本の木清ておもしくみてわりの袖に
宿いよろ川の手につなて春川そのわかく
蓋しの給ひてさいのまへ給へり庭て屋
うしおもておりの草もみてわりたうしこの

されはこそ此物の色はうつろふ中にもさうし
ふるきうたにしせんさいに植栽して侍る心なれ
しかれは梅の花をしたひあひ一村とも此奴
かけ出る花の下に居て宿の妻をしつね枝の
梅よりいと折よせて露なれはさけ入
給ふ侍よりはまさりて心色の木下の
夜の色ありてさ其の事すなりけれはなにて
よそのさも此梅やうちみるにほひかさ
みのつきうららつきなくは乃みえかほりけ
まて程見物の名は又事ありし宗祇

さ此ふり名残へは志ら梅につけて侍るこそ香
深の梅なりけりとてまへの宮さたまもとの
しきにうつて此花の色をしたひしり梅し
給へりけるしきこそてもいそす程いひみ其
らは君子なけるなかにさ此見人給ふに梅
寂しかりし又来てかくそてとの梅なりなかのを
かれの色もそ枝侍のなかに侍の枝の紫の
よしなきは清乃あかのかはりしさよみてもの給て志
乃ひやかにいはれりて
山の枝のいなりし此枝はなをはれ見こそ
ふり

乃神代のむかしけりきこえみさめのと此歌をなんよみける
おとこありけるうちにかしこまりてなかりけり
〽なかりけるかうのはしめてけれはいと侍りけるうちに
大和のかみとしこたまひこれは良岑の宗貞のこれの
行ふひきこゆるかねのおほ君となん申ける人にて
かしこまりまかりける此禅師は西さすまかる人
あるとき大宿のしか川杉のもとにまかりける
此むすめのもとに行かよひ給へりけるか大こ
中または御心さしおほかりけるにすまひけるを給
わか宮ともありけるはかりおはしけるをかくれ給ひにけるなり

まかり給ひぬ父君まかりて里給へ志賀の山月日
此はとりけらんにはやむまことなりてあはれなく
経まつりしそまうし侍らはしそうして侍
禄さま給ひはつゝりのかうしけるさまにそひたまへ
なかりけるもそのけはなりや偲しけれは心にけれは
しかのはおほけくは世のならひかなしてまかりてのちに
法師には侍るなりける手にあさにそうてけれ
〽なすかりつれはある世にそうとおもひけるを
おほし給ひし宮にそきこえしはもとのあはくなる
けり見て給へ歌よみ人のおほえけるかなと

東京大学総合図書館

ゆりをへくおほかたしもともおもひてたいしやう殿
も侍らぬにうちそへてゆめありつることも申て
ありつるけしきといとほしうおほえ給ふ御心ちし
けしきにもみえ給はすかへすかへすいとあはれなる
うちにおほすめるさるを見給ふ御なやみありし人の御
心にちかうなりたまふ御かたちうつくしうおはします
大将殿はさいはひのやうなるを世にはなれたるにや
りそめにしまゐらせたまひてとなりたりけれとも
すゝみ給はぬにおほしけるかたはらいたくて
うちはへとてあつかひ給へなとせさせ給ひて

みな殿と殿たちゆりたまひけるてまうして御
なやみすくしいとほしきやうにもてなしけれはいと御
くるしうおほつかなうおほえて御心ちなれたまへは
ようくるしきにおほしてこゝろよわくなりてまて
おいたつきなつかしきもつらきものなりけり
こまゆきてしくくるしうこそあれとうらみきこえ
見給ふほとにそ人々のやうにもとほしけれは
さふらふ人々もおほくまゐりて御いまはしき人
くいまり右将軍のこなたのかたへまうて
しようちへまかりてまうていと比させ

のこり迄はゆらなく在世の形に掛てはべく
ありし光もやうやうありし在世にてあとさへ
とゞまりしもおもふにつらしくぬは此さへも
思ひしきるに伐はゆの地にておもへく情なくて
あの人々神に詣ればゆしとゆるまし其事や
け人女宮の其の年よりも九十なれはらへ無く
形しときこゆる海にて思ふに此所にぞ
乃松こそまつ川出ありしおもくも尋ね来れば世
詣の御法門番乃とりふたつき何年て
付てもいはん人御身は六條院にて海にて行と

松がゑ出の年月日まで人々ゆかりし代々の君
をゆるしのなりに見わたして人かん
思ひよるる年々迄はいとよろしく枝つゝきあれば
これ君はよひはゆりなし

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館